銚子提
廣蓋
具足餅
鳥掛様
名奥
草膳

五段目

一もん
とひの尾

七寸
せめ

こひの尾
九寸

一 銚子渡し之事此度一ツとめよ申すり

通い

向い

一銚子法ハ三ゝ九度一つにとめより
葉一枚ね乃紫ハ世かく二たゝさき地
わたりの方へかし九まもを紙を
志ゆん一いもと酒ぬ毛ま乃紫
のと志やうをとうえん酒也
一酒ミ目の數ハ七ヒ次八ヒ酒くこ
菊の金の上ふ酒ミ目一ツ有へし
わたり九結び目の事ハ家ニを
男ハむすひ女ハむすひいりすは、
十三月のとし紀ハ十二十二月の時

五十三結ぶこと　結目のちゝ五分
寛むくすゝ切ふくさをよ極いて
絡なくあまりはねこきす結て
とひの尾付け乃すまき目数二寸まて
なりあすねまりと寄合とろふ
結めの流るる礼あし何も二すしく

一　提つゝ本乃変拝とつり紫礼のち
華右同前はさき目七ツ　大八九ツも
其ときまつのとに志そく九郎まき

廣益編

十九

廣蓋圖

一 長サ弐尺弐寸也
一 横ハ壱尺七寸四分
一 厚さ二分
一 高サ弐寸八分
但丸ニ弓付之
一 蒔絵ハ家之紋之
一 金ニて梅ノ丸入れ

すはたのしゝ雛遊時代
まつくりし見参てらし仕
そなへ給事

小
小笠原大膳大夫
加賀大夫
名

小池
桐
深来

奥之解傍

六

具足之餅餝し様

一 是ハ一ツ井かさねて上卿のことくに大きなるつよくはちを盛也但餅とはさ
まはし三方へさけくくせむすひさけ
ひきてまいり

一 大きなる餅と大小二ツ経のよくくゝる

て勝にまきよひし　もち十五也　但あ

こき餅六ツ　白き餅六ツて五同ひ

もちとくやう松を中に立ますりにひ

志餅からそ〇まく立へし

表ハ絃のとく三つまたに枝のたと立

皿すめたし前に敷斗向こうふまめる

まのたにうらし同たゝつらたれてさ橘児

合せとくあり

一　鏡餅餝やうも同しくあり

こんふ二本　米三重にて中ひくとれ[illegible]
結あり

くうし　三ツ

かうくはうこんふの下におく

たいらかね三ツ

かち栗

かやの実

白餅大

こさつ三ツ

くり三ツ

ひしもち十但五ツハ白五ツハ赤

熨斗二本ぬさ色ひとつとふれ中ほしニて結て

うらしろゆつりはの下にあり

跋

右ハ此一集ハ依御所望執心甚深之條
令染筆者也不他見有間敷者也

名義

寸志

鳥掛枝

鷹之鶴

鷹之鴈
鷹之鴨

一 摩乃鳥うけ掛乃事 山の前田乃
後し筋違へし 山鳥をは散かく

急し四緒ハ同色も縄なり
寸法の緒とは丹緒ハ上四寸
前にもむすひ様ハ左と二ッ結置て
切之一方とかし額く切し四緒ハ
丹緒より六寸置く緒ハ様ニ
一 重て切之一方とまハりに切し
一 舞鶴ハ七寸まて毛もよし上の緒は

同前

一 鷹の鳥打に掛申候時は古き
切もち申候にて遂下

一 居鞠に遂申 大根ハ腸を遂
進て遂下 秋冬ハ鶴ところく
すゝき薄に横附をかゝけぬく
横鳥に直掛く いかにも着の右を頭と

うへし

一鷹の鳥渡へき事頭と我左之
なし彼方と上へ渡し文掛様
取く見上ふのやく渡事也

一 わりに

右一巻者常家傳來雖為
秘書執心不浅依學習之労
今授与于周和之分勝絶
他言者之間補者也

名魚巻 卅弐

名魚之巻

鯛

セカイノヒレ
セトコシ
星ヲトシ
大尾ノヒレ
水中ノヒレ
スクノヒレ
徐湯ノヒレ
ソキノヒレ
二ノヒレ
メテヒレ
一ノヒレ

鱸

ナカシヒレ
一文字ノヒレ

学鯉

シハツラ
ハナツラ

マタヨノヒレ
鵜ワタリノヒレ

エカイ
塩フキ

ナキエラ

イソワタリ

ソトヒレ

シュツセノヒレ

モカツキ

ハミ

ナミ鎌
ナミキリ

又ヒレ

汐湯ヒレ

沖ノヒレ
カヽミ
ヒツ
ツハロ
ハミ
小ヒレ
大ヒレ
ハ子ヒレ
カツノヒレ
鰈
鮲
マキヒレ
尾ナカ
ウラカクシ
數ノヒレ
ハミ

ヲニヒレ
ツホエテ
ハミ
岩ツヽキ
ニノヒレ
一ノヒレ
セスレ
水フキ
エトリ
本ヒレ
小ヒレ

板下
板ダマリ
門
板上
五躰
板紙所
海
包丁當
板前
板付
ハミ

一表包丁
一裏包丁
一射包丁
一撓包丁
一疊包丁
一造包丁

里

一曲箸
一運箸
一馳箸
一添箸
一雷箸

カシラカタシ

草々稿

卅之

一 右女結文節のかけ子結之本房

下の勝白
上の勝赤

上の勝白
下の勝赤

露盛之

上の勝白
下の勝赤

秘口傳

一松竹梅小枝あり右ハ男松左ハ女竹まけ笠
男松ハ三ツ女竹ハ二ツ鉢の下横ニむせと
於くなり河成居

右一巻之書當家傳来之雖
為秘書執心之深依學者指南
今授与之畢聊不可外見他人
他言有冥罰者也